

# 行を中心として觀たる儒教

北京大學教授  
文學博士

山口 察 常

## 一 儒教と其本質なる行

現代の教育が智育に偏して行的鍛鍊が足りないとは、從來屢々指摘された所であるが、近來各所の學校で勤勞作業が行はれて、學校教育に行が取入れられる事になつた。これは誠に欣ぶべき傾向である。また、從來支那民衆の宣撫には専ら唯皇道的工作のみが施されて、佛教儒教等は顧みられなかつたが、その後方針を改めて、日支兩民族の間に共通な儒教が工作上つて來た。これも甚だ欣ばしい展開であると思ふ。そこで此の二つの事を取り纏めて考へて、「行を中心として觀たる儒教」と云ふ事につき、聊か所見を述べて見たらう。

一般に世間では儒教を現代的なものとして考へてゐない。支那でも儒教は唯、書物の上の存在で、實際的な勢力は無い、今盛に持て囃されてゐるのは道教と回教とのみであると云ふやうな話を能く耳にするが、それは甚だ誤つた觀察である。成る程儒教には寺觀もなければ、道士・僧侶の類もなく、従つて教團的組織も無いが、日常人としての道を眞面目に履み行ふ人は、特に儒教の書物を讀まずとも、儒教の信者・行者であり、従つて殊更に教團を組織しないでも國家全體が其のまゝに教團である。故に支那で現に儒教が行はれてゐないと云ふのは大きな誤である。

もつとも支那の民衆には文字の無い者が多い。それで儒教は讀書人の階級以上のものである、文字のない階級には没交渉であると云ふ人もあるが、實際は習慣上、我知らず儒教的生活様式を採つてゐる。假令目に一丁字もない無識の民と嘲られてゐても、人間らしい行ひには缺けてゐない。儒教は斯の如く長い年月の間に支那人の中に浸潤して習俗を成してゐるのであるから、容易な事では消滅しない。先年の支那革命の時には、儒教排撃論が青年の間に起つて、専制主義を擁護したのは儒教であつて、その唱首は孔子であるといふ處から、釋奠を止め、孔廟を破壊し、或は教科書の中から四書・五經關係の項を削除する等、様々の事をやつたが、民國七、八年には又復活し、蔣介石なども金を出して曲阜の廟の修復をしたのである。このやうな次第で、支那では現に猶ほ儒教が生きてゐる。これに一層の活力を加へて、日支兩民族の精神的融合を圖るのはまことに意義ある事であらうと思ふ。

そこで、最初に先づ、儒教とは何ぞや、即ち儒教の本質如何といふ問題について述べて置きたい。

普通に儒教とは、孔子を初めとする道德的教學であると解する。併しながら儒教は必ずしも孔子が初めたものとは斷ぜられない。『論語』の述而篇には明かに「述而不作、信而好古云々」とある。それでは誰が作つたかと云ふに、子思は「仲尼祖述堯舜、憲章文武」と述べてゐる。即ち孔子は堯舜文武を手本として其の説を繼承したに過ぎないと云ふのである。ところが果して堯舜が作つたのかと云ふと、易の繫辭下傳には

「古者包犧氏之王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地、觀鳥獸之文、與土地之宜、近取諸身、遠取諸物」云々、  
包犧氏没、神農氏作、斲木爲耜、揉木爲耒、耒耨之利、以教天下、云々。神農氏没、黃帝堯舜氏作、通其變、  
使民不斃、神而化之、使民宜之云々」

行を中心として觀たる儒教（山口）

とあり、また韓氏の説には

「堯以<sub>レ</sub>是傳<sub>ニ</sub>之舜、舜以<sub>レ</sub>是傳<sub>ニ</sub>之禹、禹以<sub>レ</sub>是傳<sub>ニ</sub>之湯、湯以<sub>レ</sub>是傳<sub>ニ</sub>之文武周公、文武周公傳<sub>ニ</sub>之孔子、孔子傳<sub>ニ</sub>之孟軻、云々」

とあつて、誰に初まつたか判然しない。併しこゝに特色が存するのである。佛教でも釋迦に初まると普通には言ふが、確に誰が説き初めたかは分らない所に特色が見られるのである。

斯様に原初の事は明かではないが、孔子以前の支那は政教一致であつた。故に恩師は一人であつた。つまり統治者が模範で、君にして師を兼ねてゐた。『書經』には、「百僚師師」とあつて、生活規定の標準は本づく所君にあり、其の下に又役人があつてそれぞれ模範となつてゐたのである。故に誰が儒教を初めたかと云ふやうな事は問題でなく、支那では古來、人間の集團生活が其のまゝに儒教生活なのである。

殊に「儒」の字は古くからあつた。『周禮』の天官には「以九兩緊邦國之民、一曰云々、四曰、儒以<sub>レ</sub>道得<sub>レ</sub>民」とある。また「儒通<sub>ニ</sub>道藝<sub>一</sub>以教<sub>レ</sub>民者」とも、「鄉射禮所謂鄉先生君子是也」とも云はれてゐる。故に儒とは初め役人の名であつたのが、此の頃には模範たる先生の意味となつてゐるのであつて、別に「師儒」といふ語もある。併し孔子は自ら儒を以て任じてゐない。例へば、『禮記』の「儒行篇」には、魯哀公が「夫子之服、其儒服與」と問ふと、孔子は之に答へて「其服也郷、丘不知<sub>レ</sub>儒服」と云つたとある。生れ故郷の服を其の儘着てゐるので、儒服などは知らないといふのである。乃ち其の註には「孔子不敢<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>儒自居、故言<sub>レ</sub>不知<sub>レ</sub>儒服」とある。恐らくこれが孔子の精神であらう。故に孔子の教を儒教とするのは孔子の本意かと思はれるが、戰國時代に入り天子中心の生活様式が崩壊し、諸子百家の

説が競ひ起るに至つて、本來の孔子の教を儒教と呼び初めたのである。

斯の如く、儒教とは本來の人間の生活の事であつたのが、後に轉じて孔子の思想學問を稱するに至つたものであるが次に第二の問題として、儒教は如何なることを内容とするかと云ふと、『論語』には孔子が如何に其の門人を教へ導いたかを記してある。即ち「述而篇」には、「子所<sub>レ</sub>雅言、詩書執禮皆雅言也」とあつて、主として詩經を教へた。書經の話は出てゐるが、それを讀めとは言つてゐない。堯・舜・禹を褒めてはゐるが、それ等に學べとも言つてゐない。最も多く反復せられてゐるのは詩經の事である。陽貨篇にも伯魚に謂つた言葉として、

「女爲<sub>レ</sub>周南・召南<sub>ニ</sub>矣乎。人而不<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>周南・召南、其猶<sub>ニ</sub>正牆面而立<sub>ニ</sub>也與」

とある。周南・召南とは詩經の首篇の名であつて、大に詩經を讀むことの必要を高調してゐるのである。又、同じ陽貨篇には、

「子曰、小子何莫<sub>レ</sub>學<sub>ニ</sub>夫詩。詩可<sub>ニ</sub>以興、可<sub>ニ</sub>以觀、可<sub>ニ</sub>以群、可<sub>ニ</sub>以怨。邇之事<sub>レ</sub>父、遠之事<sub>レ</sub>君。多識<sub>ニ</sub>於鳥獸草木之名<sub>ニ</sub>とも述べてゐる。之に據つて見ると、孔子は詩經を讀むことを以て君父に事へる道の行ひを勵ます手段としたのであつて、其の事は學而篇を見ると、一層バツキリと分る。即ち

「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛<sub>レ</sub>衆而親<sub>レ</sub>仁。行有<sub>ニ</sub>餘力<sub>ニ</sub>則以學<sub>レ</sub>文」

とある。親や兄に對する道を盡し、目上の有力な人に親炙して行を正しくするのが本筋で、然る後若しも餘力があれば詩を讀めといふのである。なほ陽貨篇には、子夏の言葉として

「賢<sub>ニ</sub>賢易<sub>レ</sub>色。事<sub>ニ</sub>父母<sub>ニ</sub>能竭<sub>ニ</sub>其力<sub>ニ</sub>、事<sub>レ</sub>君能致<sub>ニ</sub>其身<sub>ニ</sub>、與<sub>ニ</sub>朋友<sub>ニ</sub>交、言而有<sub>レ</sub>信、雖<sub>レ</sub>曰未<sub>レ</sub>學、吾必謂<sub>ニ</sub>之學<sub>ニ</sub>矣」

とある。親子の關係、君臣の關係、朋友の關係と、生活の範圍で重要なものを抽出して來て、それ等に對しての道を盡すことが即ち學問であるとしてゐるのであつて、反面から言へば、行さへ出來てゐれば學問の必要はないのである。次にこれは稍方向が違ふが、「雍也篇」には、哀公が孔子に向つて「弟子孰爲好學」と問うたのに對して、孔子が「有顔回者、好學。不遷、怒、不貳過」

と答へたとある。これ亦畢竟、行實が本位であることを述べたもので、孔子が顔回を推賞する所以は、其の行の上にある。

「子曰、吾與回言終日、不違如愚、退而省其私、亦足以發。回也不愚」（爲政篇）

「君子食無求飽、居無求安、敏於事、而慎於言、就有道而正焉。可謂好學也已」（學而篇）

とあるのも、行其のものが學で、知識でないことを語るものである。

また言と行についても、孔子は「先行。其言而後從之」（爲政篇）といひ、「古者言之不<sub>レ</sub>出、恥<sub>レ</sub>躬之不<sub>レ</sub>逮也」（里仁篇）とも云つてゐる。これ亦、言行の不一致を避けて、行を勵ましてゐるのである。孔子の門弟の子路も勇敢に行を勵んだ人であるが、これも「言之必可<sub>レ</sub>行也。君子於其言、無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>苟而已矣」（子路篇）と説いてゐる。これ等を見て、孔子及び其の門下の儒流が如何に行實を重んじたかが知られるのである。

次にそれでは、其の行の標準は何かと云ふと、それが即ち禮である。私は禮を以て人々の在るべき地位の表示であると考へる。即ち禮がある事に依つて其の人の社會的地位が明瞭になる。そして其れが明瞭にされる事に依つて社會全體の組織が整へられるのである。父が父としての舉動は父の表示即ち禮であり、進止動作の規律である。斯様に銘々各

個の地位を表示して、社會的規律を立てる所に行の標準が存するのである。そこで孔子は顔回が仁の實行條目について問うた時に

「非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>視、非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>聽、非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>言、非<sub>レ</sub>禮勿<sub>レ</sub>動」(顔淵篇)

と答へた。即ち人として其の一舉一動悉く禮に適することが仁であると言つた。孔子が禮を以て行の標準規定とした事は、これで分る。更に又、「季氏篇」には、陳亢が孔子の子の伯魚に「子亦有<sub>二</sub>異聞<sub>一</sub>乎」と尋ねると、伯魚が之に對して

「未也。嘗獨立。鯉趨而過<sub>レ</sub>庭。曰、學<sub>レ</sub>詩乎。對曰、未也。不<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>詩、無<sub>二</sub>以言<sub>一</sub>。鯉退而學<sub>レ</sub>詩。他日又獨立。鯉趨而過<sub>レ</sub>庭。曰、學<sub>レ</sub>禮乎。對曰、未也。不<sub>レ</sub>學<sub>レ</sub>禮、無<sub>二</sub>以立<sub>一</sub>。鯉退而學<sub>レ</sub>禮。云々」

と答へたとある。曩には詩を學べと云つたが、これは文である。文だけではいけないから更に禮を學べと云つた。禮は即ち行である。故にこれも亦、孔子が行の規定としての禮を如何に重視してゐたかを證するものである。

ところが孔子の禮は甚だ複雑で、必ず之を形に現すことを要求した。假令精神があつても形に現れなければ眞の禮でないとした。即ち敬の心があると共に、他の一方では形としての恭がなければならぬ、此の二つが具はつて初めて敬と云へるのだとした。それで孔子自ら、實際に之を身に現して門弟子を率ゐた。人々も亦、生きた手本を孔子に求めて人たるの道を実踐した。だから時代は移つても、君師一人の時と變らなかつたのであるが、併し其の生きた模範としての孔子が一たび易筮すると、標準がなくなつた。さうなると孔子が遺した言葉を標準とする外はない。そこで學問の意味が轉變して、孔子の言葉を穿鑿して、それを行の上に現すことを目的とするに至つた。

孔子に次ぐ孟子も行中心に道を考へたことは勿論である。孟子は特に仁義といふことに力を入れて説いてゐるが、離婁章句の上では

「仁之實、事親是也。義之實、從兄是也。智之實、知斯二者弗去是也。禮之實、節斯二者是也。樂之實、樂斯二者、樂則生矣。生則惡可已也。惡可已、則不知足之蹈之、手之舞之」

と、行の上で仁義を説き顯してゐる。これは學問を文辭の理解に止めずして形に現することを勧めたものであるが、更に又勸學篇には

「君子之學也、入乎耳、著乎心、布乎四体、形乎動靜、端而言、蠕而動、一可爲法則。小人之學也、入乎耳、出乎口。口耳之間四寸耳。曷足以美七尺之軀哉」

と一層明瞭に述べてゐる。身體に現れ、動靜に現れるのが學問。あつて、學ぶ事により身の廻りの事が定まり、それで初めて効果を示すのだと見てゐる。

大體此の邊までは、學問の意義を行中心に考へてゐたのであつて、本質的に儒教は行が本である、單に文辭を事とせずして行を重んずる所に眞面目があつた、孔孟の學はこれで一貫してゐるのである。ところが後代、學が行と離れるに至つて、儒教の價値が下つた。

## 二 儒學と學行の分離

儒教の本質が行にあり、それが儒教成立の根本のものであつたことは、前に述べた通りであるが、後には次第に轉化

して儒學となつた。儒教と云ふと、優れた人格を手本として己を磨き向上の道を辿ることが考へられるが、孔子の歿後戦國時代に諸子百家の學が競ひ起るに至つて、一般の風潮は儒教の根本々質に副はぬものとなり、王道主義の仁義道德とはコントラストを爲す儒學に變じたのである。

今茲に其の轉變の經過を述べると、先づ儒教に代つて勢力を占めたのは法家の思想である。元來「法」の字の古文は「灋」であつて、これは灋といふ獸と、水と、去るとの三要素から成つてゐる。其の獸が影を隠して法となつたのである。此の法の目的は社會生活の平靜均一を破る者に制裁を加へる事にあるが、之に依つて統一の業を遂げ、國を成したのは秦であつた。法中心の秦の政治に對しては一方で謳歌する者もあつたが、餘りに勢に乗つて權力を振ひ、王道仁義の施設が無かつたので、儒者たちは不平を鳴らし非難の聲を放つた。その據りどころは書經であつて、其の中に書かれてある先王の善政と比較して大に秦の政治を難じたのである。そこで挾書律といふものが出來て、書經を持つことを禁じ、次いで挾書坑儒といふ暴政が出現したと歴史は報じてゐる。それが何處まで事實であるかは疑問であるが、何れにしても、法律萬能主義の政治が儒教に對する壓迫であつたことは争はれない。秦が滅んで、次に天下を支配したのは漢であるが、漢の高祖は初め黄老の道を以て治める方針を取つた。當時陸賈は高祖のために『新語』十二篇を著して、儒教を以て政治をせよと勧めたが、實現さるゝに至らず、文帝の代には賈誼が重用されたが、此の時も儒教を實際政治の上に現すまでには至らなかつた。漸くそれが用ゐられ初めたのは、武帝の時以來である。此の時代には公孫弘・董仲舒等が並び出て、儒術を政治の中心とせんと獻言し、その結果、博士も置かれ、五經博士が揃つて、恰も國教の觀を呈した。此の際優れた人物が居て、一世の模範となり、人々を率ゐたならば、當然に儒教の復興となつたのであらうが、



天晴れ孔子の後を以て任ずる誠見ある人物がなかつたので、折角の機運を逸し、僅に當時傳はり残つた經典を搜し出して、型ばかりの五經を揃へ、大學を立て、學としての組織を立てるに終つた。従つて經書が出て、之をスラスラと解釋することが出來ず、一字一句に就ても多くの説が岐れるといふ有様で、況して古文を満足に讀解する力はなかつた。斯様にして、會て人格を本にして立つた儒教は變じて一家の私説を立て、章句の解釋を争ふ儒學となつて了つたのである。

「漢自孝武表章六經之後、師儒雖盛、而大義未明、故新莽居攝、頌德獻符者、徧於天下」

とは、當時の狀況を記したもので、斯様な臍甲斐ない有様では、何の爲に論語を讀み書經を讀んだのか分らない。畢竟これは學は學、行は行と分離して、學行相伴はないに至つた結果である。故に役人を選ぶに當つても、文章を作つたり解釋したりする方面の賢良科では「每對輒百餘人、又徵詣公車、上書自銜譽者以千數」といふ盛況であつたが、孝廉の科に於ては「萬家之懸亡、應令者」また「闔郡不薦一人」といふ寥々たるものであつた。『文獻通考』には之を評して

「蓋賢良則稍文墨材學者、可充選、而孝廉則非有實行可見者、不容謬舉、故也」

と言つてゐる。人格中心の儒教が手先口先ばかりの儒學となり了つた結果は實に斯の如きものであつた。そこで此の弊を矯めんとして起つたのが後漢の光武帝である。光武帝は高祖九世の孫で王莽を討つて後漢を立てた人であるが、「有鑒於此、故尊崇節義、敦厲名實、所舉用者、莫非經明行脩之人」といふ治績を示したので、「風俗爲之一變」したと、顧炎武の『日知錄』に記してゐる。故に後漢には節義の人も相當出たが、大義を踏んで過らなかつたのは、多

くは實動的な政治家又は將軍の類で、學者では餘り其の方面に勝れた人はなかつた。殊に馬融の如きは、其の傳記に據ると

「善鼓琴、好吹笛。達生任性、不拘儒者之節。居宇器服、多存侈飾、常坐高堂、施絳紗帳、前授生徒、後列女樂。弟子以次相傳、鮮有入室者云々」

とある。當代學者の風はこれで察せられるであらう。

後漢から遷つて三國時代となると、老莊の思想が流行し、學者は經典を讀んでも行は其れに従はず、自づから老莊風の放埒に流れる者が多かつた。易の玉弼、論語の何晏は、共に當時の代表的學者であるが、其の解釋は老莊的で、決して儒教本來の意義ではなかつた。『日知錄』には此の時代の儒風を

「三國鼎立、至此三十年。一時名士風流、盛於洛下、乃其一棄經典而倚老莊、蔑禮法而崇放達。視其主之顛危、若路人然云々」

と記してゐる。魏の朝廷は曹氏であるが、それが權臣司馬氏の爲に篡はれて晉となつても、時の儒者等は之を視ること路傍の人の如くであつたといふ、これで時代の風潮を略ぼ察知することが出来るが、殊に甚だしいのは、嵇氏の例であつて、父を殺した晉の帝に仕へた。そして後には又自分も殺されたが

「夫紹之於晉、非其君也。忘其父而事其非君、當其未死三十餘年之間、爲無父之人、亦已久矣。而蕩陰之死、何足以贖其罪乎云々」

と『日知錄』には評してゐる。このやうな事では儒者の行ひとは云へないのであつて、學と行とが全く相乖離してゐる

のである。

南北朝を経て隋になつても、此の學行分離の弊は改まらず、儒學は只章句の研究を主とするのみであつたので、文帝は大學に學生を養ふことの無益を感じて斷然減員をしてゐるが、唐に入つてもやはり同じ事で、太宗の時代に國家試験を行つた際の答案に依ると、人に師たるの學少く、官に當つて職に適ふ者少く、學問の本筋を外れて末技に趨る者が多かつたと記されてゐる。『兩漢五經博士考』の序に

「後世法律繁興、而經義遂爲虚說、學者以經術自娛、於政事風教無與也。夫窮經以致用、致用莫大於教、人取之士云々」

とあるのは全く事實を道破したものであつて、斯くして兩漢より隋唐にかけての儒學は、實用と懸絶して只章句を弄ぶに過ぎず、而も其の風は世と共に益々甚だしくなつた。これが新しい宋の學風を起す動機となつたのであつて、宋學が起つて茲に實學に歸るに至つたのである。

### 三 行の復活と儒教の現代的意義

人格中心の儒教が遂に章句の事に拘泥する儒學と成り下つた漢唐の狀勢は、前述の如くであるが、宋代に及んで儒者の自覺が發し、儒學其のものゝ見直しが起つた。これには種々の影響が考へられるが、時の儒者たちが、從來の儒學では直ちに孔子の精神は把握されないと自覺した所に、注視すべきものがあると思ふ。

第一に宋學の端を啓いたのは周濂溪である。此の人が出る以前の事を朱子が「韶州先生祠記」に書いてゐるが、それ

には

「秦漢以來、士不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>學、言<sub>レ</sub>天者遺<sub>レ</sub>人而無用、語<sub>レ</sub>人者不<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>天而無本。下學者不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>上達而滯<sub>レ</sub>於形器、必<sub>レ</sub>上達者不<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>下學、而溺<sub>レ</sub>於空虛、優<sub>レ</sub>於治<sub>レ</sub>已者、或不<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>人、而隨<sub>レ</sub>世以<sub>レ</sub>就<sub>レ</sub>功名者、又未<sub>レ</sub>必<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>其本<sub>レ</sub>而堆<sub>レ</sub>之也。是以天理不<sub>レ</sub>明、而人慾熾、道學不<sub>レ</sub>傳、而異端起、人挾<sub>レ</sub>其私利、以<sub>レ</sub>馳<sub>レ</sub>騫於一世者、不<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>老死、則不<sub>レ</sub>止、而終亦莫<sub>レ</sub>悟<sub>レ</sub>其非<sub>レ</sub>也」

とある。此の様な状態であつたから、周濂溪は之を慨して所謂宋儒性理の學を開いたのであるが、其の學については張南軒が「廣東憲司先生祠記」に次の如く書いてゐる。

「先生之學、淵源精粹、實自<sub>レ</sub>得於心、而其妙乃在<sub>レ</sub>太極一圖、窮<sub>レ</sub>二氣之所<sub>レ</sub>根、極<sub>レ</sub>萬化之所<sub>レ</sub>行、而明<sub>レ</sub>主靜之爲<sub>レ</sub>本、以<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>聖人所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>人極、而君子之所<sub>レ</sub>當爲<sub>レ</sub>者、由<sub>レ</sub>秦漢<sub>レ</sub>以來、蓋未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>臻<sub>レ</sub>於斯<sub>レ</sub>也」

假令その太極圖については議論があつても、その學と人格とが一致融合してゐるのは偉い所で、只理論を講じ學説を述べるに止まらず、學の具體化、人格化に進んでゐるのである。次に『宋史本傳』には

「侯師聖、學<sub>レ</sub>於程頤、未<sub>レ</sub>悟、訪<sub>レ</sub>惇頤。惇頤曰、吾老矣、說<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>詳。留對<sub>レ</sub>榻夜談、越<sub>レ</sub>三日<sub>レ</sub>乃還。頤驚異<sub>レ</sub>之曰、非<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>周茂叔<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>耶。其善開<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>此」

また『濂溪集』には

「明道先生嘗曰、昔受<sub>レ</sub>學於周茂叔、令<sub>レ</sub>尋<sub>レ</sub>顏子仲尼樂所、所<sub>レ</sub>樂何事」

とあるが前者は周濂溪が人を導く場合、如何に自らの人格を通して導いたかを語るものであり、後者と併せ見て、さす

がに宋學を初めた人格者だけの事があると思はれる。

周濂溪と並んで胡安定も亦宋學を起した一人である。これは二程子殊に伊川が私淑して生涯その字號を呼ばず、必ず安定先生と尊んだ人である。『宋元學案』には、此の人に關して

「先生倡明正學、以<sub>レ</sub>身先<sub>レ</sub>之（中略）、其教<sub>レ</sub>人之法、科條纖悉具備、立<sub>レ</sub>經義治事二齋。經義則選擇其心性疏通、有<sub>レ</sub>器局<sub>レ</sub>可任<sub>レ</sub>大事<sub>レ</sub>者、使<sub>レ</sub>之講<sub>レ</sub>明六經。治事則一人各治<sub>レ</sub>一事、又兼<sub>レ</sub>攝<sub>レ</sub>一事、如治民以安<sub>レ</sub>其生、講武以禦<sub>レ</sub>其寇、堰水以利<sub>レ</sub>田、算歷以明<sub>レ</sub>數是也」

とも、又

「凡從<sub>レ</sub>安定先生<sub>レ</sub>學者、其醇厚和易之氣、一望可<sub>レ</sub>知」と記してゐる。これで胡安定の教育方針と、その感化とが略ぼ分るであらう。程伊川の評語には

「安定先生之門人、往々知稽古愛民矣、于從政乎何有」

とあるが、確に胡安定は學問を單なる語記に止めず、之を活かすことに着眼したのである。次に張橫渠は、當時の學問の缺點に着眼した。それについて『橫渠語錄』には左の如くある。

「教<sub>レ</sub>小兒<sub>レ</sub>先要<sub>レ</sub>安祥恭敬、今世學不<sub>レ</sub>講、男女從<sub>レ</sub>幼便驕惰壞了、到<sub>レ</sub>長益凶狠、只未<sub>レ</sub>嘗爲<sub>レ</sub>子弟之事、則於<sub>レ</sub>其親、已  
有<sub>レ</sub>物我、不<sub>レ</sub>肯屈下、病根常在、又隨<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>居而長、至<sub>レ</sub>死只依舊」

恐らくこれも、學問は人格を通すべきものだと思つた例の一つであらう。

次には楊億の語として『小學』に次の如く出てゐる。

「童稚之學、不止記誦、養其良知良能、當以先人之言爲之」

斯様に色々述べられてある所を見ると、宋代の學者は經典を尊ぶと共に之を如何にして自身に具現すべきかを教へる事に一致してゐる。これは正に行の復活であつて、後にもそれが永續すればよかつたが、遺憾ながら永續しなかつた。

陸象山もやはり徳性を尊ぶ方面で人を誨へた人で、其の門下には實踐躬行の士が多かつたが、其の遺した語に「易簡工夫終久大、支離事業竟浮沈」とある。本心の發明が行の上に出て來るといふのが、究極の精神であらう。王陽明は知行合一を説き、殊に行を重視した學者であるが、「知是行的主意、行是知的功夫、知是行之始、行是知之成」と述べてゐる。また稍詳しいが、

「學至於窮理至矣、而尙未措之於行、天下寧有是耶。是故知不行之不可以爲學則知不行之不可以爲窮理矣。知不行之不可以爲窮理。則知知行之合一並進、而不可以分爲兩節事矣」

とも云つてゐる。何れも實行を重んじた言葉である。併し王氏の學も門流の末になると、漸く行を疎そかにする傾向があつて、非難を受けたのは遺憾である。

名臣言行録にも儒教の精神を體現した人の事が多く出てゐて、明代にも行實を重んじた學者があつたが、優れた人物は皆、宋學の實行者である。例へば方孝孺の如きは一門節義に死んだ立派な人物であるが、これも宋學の薫化を受けたのである。併し此の種の人は次第に稀になつて生活の爲に官吏たらんとして修學する者を多く生じた。此の傾向は清朝に至ると一層加はつたが、併し行實を尊重する學者は無かつたのでない。先づ第一には明の遺臣顧炎武が算へられる。此の人の出所進退は、宋學の精神の體現である。その語の記録されたものは多くあるが、

「所謂聖人之道如何。曰博學於文、曰行己有恥、自一身以至天下國家、皆學之事也。自子臣弟友、以至出入往來辭受取與之間皆有恥之事也」

「嗚呼士而不先言恥、則爲無本之人、非好古而多聞、則爲空虛之學、以無本之人、而講空虛之學、吾見其日從事於聖人、而去之彌遠也」

の二つは最も當れる言であつて、要するに學は身に行ふに在り、一舉手一投足即ち學であるとの精神が現れてゐる。

次には顔元であるが、これ亦實學の人、行中心の學を以て著れた人である。康熙帝頃に活躍した學者で、その語に「學者學爲人子、學爲人弟、學爲人臣也」とあるが、これは確に吾等の學的態度に對する穿つた言葉であつて、此の心持があつて始めて孔子の古へに復ることが出来るのである。

「讀書無他道、只須在行字著力。如講學而時習、便要勉力時習、讀爲人孝弟、便要勉力孝弟、如此而已」といふのも同じ意味の説明である。また「人之爲學、心中思想、口内談論、儘有百千義理、不如身上行一理之爲實也」とも述べてゐるが、これも大に穿つた言葉である。更に、

「古者弟子爲學、兵教之事、父事兄、服勞奉養。今世爲學、惟教之讀書作文、逸惰其身、而奴隸其父兄。此時文取士之害、讀作爲學之弊也」

と云ふに至つては、學行分離の弊害を指摘した言として深く味はふべきである。

以上に述べ來つた如く、兩漢以來學行分離の傾向漸く強く、唐に至つて其の頂點に達したが、宋學が起つて、學問を人格に現すことを中心として教へたから、一世の學風は次第に革まり、延いて明代・清代にも其の體得者を出した。顧

炎武の如きも宋學を受けて殊に行を重んじた。顔元は直ちに孔孟に歸れと主張したが、これ亦行の外に學無しとして、孔孟精神の實現に力めたのである。

要するに儒教の本質とする所は何かといふと、それは之を自身に體現することが根本の精神であると考へられる。そこで今日、此の儒教の精神を如何にして復活すべきかは甚だ重大な問題である。一般には儒教を以て、徒らに鹿爪らしく、且つ古臭いものとして考へてゐるやうであるが、既に述べたやうに、儒教は日常生活の軌範である。一家内が和合して道を盡すことが其のまゝ儒教であり、之を推し擴めては、我々の社會生活が直ちに孔孟の學である。故に儒教を復活するといふことは、即ち我々の進止動作の上に之を應用し具現することである。今我國で行はれてゐる修身の教は、大體儒教の精神を取入れたものである。故に之を單に書物の上だけでなく、行の上に現せば、それが即ち儒教の復活である。斯くして儒教の精神を我々の社會生活の上に活現してゆくことが最も正しい生き方であることを教へ、我々の一生を通じて、一舉一動、何者に對しても恥づかしくないやうにする事が出来れば、それが其のまゝに孔孟の精神であるが、而も現在に於ては其の事が殆ど實現されてゐない。一家然り、社會團體然りである、故に之が實現に努力するところに、儒教の現代的使命が存すると云はねばならぬ。

近來頻に行とか勤勞奉仕とか唱へられてゐるが、勤勞の精神は、日常坐臥の間に實現することが必要であつて、其の精神が直ちに我々の生活に生きて働くのでなければ、眞の勤勞の意味はない。大團體を組織して共同働作をするのもよいが、それよりも寧ろ小人數で實際に指導する方が一層効果的である。故に學校などで限られた時日に行ふよりも、家庭で平生行ふのが、その精神を徹底する所以である。私は其れがやがて儒教の現實的復活の方途であると思ふ。